Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-09-10

ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観――シンパシーに乏しい人間の描写からの考察――

石井，昌子

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2024-03-25

(Date of Publication)
2025-03-01

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第8796号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490021

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式 3）

論　文　要　旨

氏　名　石井 昌子
専　攻　文化相関・ヨーロッパ・アメリカ文化論
指導教員氏名　西谷 拓哉

論文題目

ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観
――シンパシーに乏しい人間の描写からの考察――

論文要旨

George Eliot (1819–80)、本名 Mary Anne Evans は、19 世紀イギリスの最も完成度の高いリアリズム小説家の 1 人とみなされている。リアリズムは様々に定義されているが、本論文では、登場人物の心理や外部事実の合理的で詳細な記述があること、および物語中の出来事の蓋然性が高いことをもってリアリズムの条件と考える。エリオットは道徳の基礎にシンパシーを置いているので、彼女が小説の様式としてリアリズムを採用する目的は、読者の登場人物への理解を深め、「我々の仲間」として登場人物に対するシンパシーを高めることにある。

本論文の目的は、上記のようなリアリズムの基本的要件に立ち返り、後期作品に向かうにつれてエリオットの道徳観が成熟するとともにリアリズムが進展してゆく過程を明らかにすることである。その方法としては、物語中のシンパシーに乏しい人間の描き方のリアリズムの進展に焦点を当て、その背後にある作者の道徳観の成熟を推測する。なぜなら作品のリアリズムの進展は作品から見て取ることができ、また作者のシンパシーの対象の広がりという道徳観の成熟はシンパシーに乏しい人間の描写に顕著に表れるからである。

エリオットの作品のリアリズムを通時的に論じる場合、初期作品はリアリズムに沿っているが中期作品以降は「道徳的寓話」であると見なすのが、エリオットの同時代から 20 世紀半ばまでの定説であった。それ以降も現在まで、エリオットの道徳観においてシンパシーに乏しい人物は個人もしくは社会にとって一律に有害であると考えられ、その心理や、個人もしくは社会に対する影響の吟味はなされなかった。

本論文は従来の見方とは異なり、シンパシーに乏しい人物が、家族や社会にとって有害で追放されるか改悛させられねばならない存在から、後期作品においては、 シンパシーに乏しいままで家族をより大きな絶望から救うという肯定的価値を有する存在へ、あるいはそ

の被害者的心理も描かれる存在へと変化していることをテキストの描写および物語の時代背景から探る。このことは初期作品から後期作品に向けてリアリズムが進展していることを意味する。また、シンパシーに乏しい登場人物の性格の多面性や、他の人間への結果的にポジティブな影響を認めることは、シンパシーに欠ける人間も「我々の仲間」とみなすというエリオットの道徳観の理想の実現である。以上の2点はこれまで指摘されたことがない。

本論文では、エリオットの小説における上記のようなリアリズムと道徳観の密接な関係、および両者の進展を論ずるために、次のような構成をとった。

序論で本論文の目的、方法、先行研究、意義、構成を説明したのち、第1章では、文学におけるリアリズム、とくに19世紀イギリス小説のリアリズムの特徴について説明しエリオットの位置づけをした。次いで、エリオットの小説のリアリズムを否定するポスト構造主義批評とその克服、そしてそこから生まれたエリオットのリアリズムのより深い理解を紹介した。

第2章では、エリオットのシンパシーを基礎に据えた道徳観、およびシンパシーと道徳の一般的関係について説明するとともに、作品論の最初として、エリオットが比喩を用いたリアリズムにより効果的に登場人物の心理的苦難とシンパシーを描いていることを、最初の短編集である *Scenes of Clerical Life* (1857) の1篇 "Janet's Repentance"を取り上げて説明した。

第3章では、エリオットの最初の長編小説 *Adam Bede* (1859) の主役の1人でシンパシーに乏しい Hetty の心理と性格の描き方を検討した。語り手はヘティの利己的な側面は詳細に描くが、改悛やシンパシーの芽生えといったポジティブな側面の描写には消極的であることが、テキストの詳細な分析から明らかになった。語り手（およびその背後の作者）は登場人物の性格を固定的に色分けしており、『アダム・ビード』においてはリアリズムがまだ十全には達成されていないのである。

第4章ではまず、*The Mill on the Floss* (1860) の結末の洪水の場面に着目し、そこでは主人公 Maggie を勘当した兄 Tom を改心させるためにきわめて蓋然性の低いプロットが使われ、リアリズムからの逸脱が見られることを明らかにした。次いで、従来批評家から一貫してシンパシーに乏しい人物と見なされてきたトムの人物描写を分析し、トムのシンパセティックな側面や環境の変化による性格の変容も十分に描かれている点でリアリズムが進展していることを指摘した。『フロス河畔の水車場』のリアリズムには、マギーの自分に対するトムの愛情への執着とその背後にある作者の自伝的要素が影響している。

第5章では、*Middlemarch* (1871–72) でこれまで見落とされてきたリアリズム性について論じた。その分析に入る前に、中期作品である *Romola* (1862–63) と *Felix Holt: The Radical* (1866) におけるリアリズムの進展度に言及した。両作品とも、人物の性格の多面性を描くという点でのリアリズムにおいて『フロス河畔の水車場』よりも後退しているが、『フィーリクス・ホルト』には『ミドルマーチ』の先駆と言える点がある。続いて、『ミドルマーチ』について、シンパシーの多寡という点から、Edward Casaubon と Dorothea、Rosamond と

Tertius Lydgate の 2 組の夫婦の有り様に注目し、特にロザモンドを肯定的に解釈することを通して、シンパシーに乏しい人間もシンパセティックな人間同様に他者の役に立ち、また苦悩する「我々の仲間」として描かれるように変化していることを示した。

以上のように、本論文はエリオットの主要作品を通時的に分析し、作者の道徳観の成熟がシンパシーを持って描く対象を広げ、その結果リアリズムが進展してゆく過程を、中期小説におけるリアリズムの停滞も含めて示すことができた。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏　　名	石井　昌子			
論文題目	ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観 ──シンパシーに乏しい人間の描写からの考察──			
判　　定	合　　格			
論文チェックソフトによる確　　認	☑　確認 ☐　未確認　　理由：			
審査委員	区　　分	職　名	氏　　名	論文審査結果について
	委員長	教授	井上　弘貴	☑　確認
	委　　員	教授	西谷　拓哉	☑　確認
	委　　員	教授	松家　理恵	☑　確認
	委　　員	ノートルダム清心女子大学文学部・教授	新野　緑	☑　確認
	委　　員	西南学院大学外国語学部・教授	金子　幸男	☑　確認

要　　旨

本論文の目的は，19 世紀イギリスの代表的作家であるジョージ・エリオットの小説におけるリアリズム描写を分析し，その背後にあるエリオット自身の道徳観の変化を探ることである。エリオットが様式としてリアリズムを採用する目的は，読者の登場人物への理解を深め，「我々の仲間」として登場人物に対するシンパシーを高めることにある。本論文では，リアリズムの要件として人物の心理や外部事実の詳細な記述があること，および物語中の出来事が合理的で蓋然性が高いことが挙げられている。本論文はシンパシーに乏しい人物の扱い方にこそ作者の道徳観が如実に現れるという観点からエリオットの主要作品を通時的に分析し，そのような人物の言動に関し，上記の要件に即してリアリズム描写の達成度を測り，作者の道徳観の成熟，すなわちシンパシーの対象の拡大を探るという方法がとられている。先行研究では，エリオットの初期作品はリアリズムに添っているが，中期以降の作品は，登場人物の性格や登場人物が置かれた状況は作者の道徳意識から生じたもので，現実世界に密着することのない「道徳的寓話」であると考えられていた。また，エ

リオットの小説において，シンパシーに乏しい人間は常に周囲の人間や社会にとって有害な存在として描かれていると見なされていた。それに対して，本論文は，エリオットが後期に向かうにつれてシンパシーに乏しい人物を十全に描くようになることを指摘し，作者の道徳観と小説のリアリズムが密接に連関しつつ深化・進展していると結論づけている。シンパシーに乏しい人間という視角からエリオット文学の特質を解明する点に，本論文の学術上の独自性と功績が認められる。

本論文では，まず第 1 章においてイギリスのリアリズム小説の起源と発展，その中でのエリオットの位置づけが確認される。文学におけるリアリズムは非常に幅広い概念であるが，学位申請者は先行研究を渉猟し，本論文での定義を明快に整理している。第 2 章では本論文の重要な鍵概念であるシンパシーについて，エンパシーと対比しつつ定義するとともに，シンパシーを基礎に据えたエリオットの道徳観について説明している。また，「ジャネットの悔悟」（1858）という初期短篇に即して比喩表現とリアリズムの関係が考察され，比喩はリアリズムを損なうものではなく，むしろ登場人物に対するシンパシーを高める機能を持つことが明らかにされる。

第 3 章から第 5 章にかけて，エリオットの主要な長編小説が通時的に扱われる。そこでは，シンパシーに乏しい人物の心理やそういった人物が他の人物や社会に及ぼす影響について，文化的・社会的背景も考慮に入れながら，言語表現に密着して詳細に分析され，上記の結論が導き出されている。第 3 章では，長編第 1 作『アダム・ビード』(1859)が扱われる。従来この作品のリアリズムが疑問視されることはなかったが，申請者はヘティという人物についてその内面の苦悩や改悛に関する記述が著しく欠落していることに着目し，この小説においてはシンパシーに乏しい人物に対する作者の道徳的寛容度が低く，リアリズムが十全に達成されていないと論じている。

第 4 章では，『フロス河畔の水車場』(1860)の主人公マギーの兄であるトムがこれまでシンパシーに乏しい人物と解釈されてきたのに対して，トムについての“manly”，“masculine”という表現の使い分けや当時の男性観に即して，トムのシンパセティックな側面も十分に描かれていることが指摘される。その一方で，結末の洪水の場面に関して，申請者は兄妹の行動をプロットした地図を作成するなどして二人の行動の非合理性を明らかにし，洪水の導入は二人の和解を描くための不自然な展開であり，そこにシンパシーに対するエリオットのオプティミズムが見られることを説得力をもって示している。そこから，この作品はエリオットの道徳的寛容度とリアリズムの達成度に関して，『アダム・ビード』と『ミドルマーチ』の中間的位置にあると結論づけられる。

第 5 章では，中期小説におけるリアリズムの一時的停滞が指摘されたのち，『ミドルマーチ』(1871-72)においてエリオットのリアリズムが一つの頂点に達したことが示される。カゾボンとドロシア，リドゲイトとロザモンドという 2 組の夫婦の比較を通して，前者においては高潔な妻の同情と献身が，シンパシーに乏しい夫を追い詰め，かえって道徳的に堕落させてしまうこと，後者においては夫の医学研究に共感することもなく奢侈にふける妻が，結果的に夫を世俗的とはいえ一定の社会的成功に導くという交差が示され，シンパシー（あるいはその欠如）が有する両面価値が指摘される。申請者は，特にロザモンドのように生涯シンパシーに乏しい人間が，内面の苦悩やポジティブな影響力も含めて全人的に描かれている点に，エリオットの道徳観の成熟とシンパシーを抱く対象の拡大，それとともに手法としてのリアリズムの進展が認められるとしている。

以上のように，本論文の学術的意義は，「シンパシーに乏しい人間」という，先行研究には見られなかった独自の観点から，エリオットの道徳的寛容度が高まり，その結果リアリズムが進展して

いく過程を丹念に追い，エリオットの主要作品について新たな解釈を明快に提示した点にある。ただし，シンパシーに乏しい人物という分析視角は，その人物の階級，ジェンダーなどからの踏み込んだ考察や，シンパシーに溢れた人物や逆に道徳性の著しく疑わしい人物との対比という枠組みの設定によって，いっそうその方法論的な独自性と有効性が際立ったであろうと思われる。この点を本論文の今後の課題として指摘しておきたい。とはいえ，申請者の研究は他の作家にも十分応用可能なものであり，19 世紀イギリス小説における道徳とシンパシーの関係という非常に大きなテーマについて考察するための重要な視点を提示していると評価できる。さらに言えば，現在，心理学，哲学など様々な分野においてエンパシーについての研究が進展している中で，本論文は，文学作品というものが読者の共感をいかに醸成していくものであるかという点から，他分野の研究とも連関し，広い意味でのシンパシー／エンパシー研究に貢献するものである。

以上の点から，本研究はジョージ・エリオットの小説をその言語表現及び 19 世紀イングランドの社会的・歴史的背景から分析し，エリオットの道徳観及びシンパシーの深まりとリアリズム表現の進展の相関関係について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると評価できる。よって，学位申請者の石井昌子は，博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

＊

なお，本論文の作成過程での申請者の研究業績は以下の通りであり，コースワーク型履修プログラムの要件を満たしていることを確認した。

学術論文（すべて査読あり。プロシーディングスは除く）

2021 年（1 年次）

8 月　“Sympathy, Morality and Metaphor: ‘Janet’s Repentance’ and ‘Recollections of Ilfracombe.’” *The George Eliot Review Online*, no.52, pp. 85-93.

12 月　“Vulnerability of Heathcliff, ‘a Devil,’ in *Wuthering Heights*.” 『ブロンテ・スタディーズ』第 7 巻 1 号，pp. 31-46.

2022 年（2 年次）

11 月　「語り手の心の鏡に映らないもの――『アダム・ビード』再考」『ジョージ・エリオット研究』第 24 号，pp. 65-81.

2023 年（3 年次）

（投稿，採択済，2024 年 8 月発行予定）“Development of Realism in *Middlemarch*: Reinterpreting Rosamond.” *The George Eliot Review Online*, no.55.

学会発表（すべて査読あり）

2022 年

12 月　「ロザモンドがリドゲイトに幸福をもたらした可能性――シンパシーに乏しい登場人物の功績の再評価」日本ジョージ・エリオット協会第 25 回大会，日本大学

2023 年

5 月　「『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムと道徳観の相克――トムとマギーの兄弟愛の描き方からの再考」日本英文学会第 95 回大会，関東学院大学

12 月　「ジョージ・エリオットのリアリズムの進展における『急進主義者フィーリクス・ホルト』の位置づけ」第 18 回日本英文学会関西支部大会，神戸大学